

FORUM

# 月刊 フォーラム

創刊  
昭和51年  
11月2日

21世紀へ架橋する知の冒険

1996 5

- 国民国家の危機と新しい市民権 奔馳日出治
- 「主権国家」の終焉と市民的不服従 今井弘道
- 象徴天皇制の「国際化」へ向けた「再定義」 天野忠一  
——皇室外交と皇太子の海外旅行——
- 国家なきものの風景 佐原徹哉  
——セビリア民衆と民衆——
- 生きつづけるナショナリズムのレトリック 田中智彦
- 政治分析における新しい基準 テレル・カーヴァー  
——時間・空間・速度—— 内田弘毅

## 国民国家

生きるまな越え方

FORUM 月刊 フォーラム

特集 国民国家

生きるまな越え方

1996 5 社会評論社

世界が注視！ 初の総統直接選挙の  
有力候補が語る台湾の過去・現在・未来。

緊急出版！

# 自由台湾への道

新時代の旗手  
彭明敏自伝

台湾は  
どうなる？

鈴木武生 桃井健司訳 この三月の、台湾初の総統直接選挙をめぐる、米・中・台から目が離せない。アジアの「奇跡」といわれる経済成長下にある台湾の、政治的履歴と今後を読み解く格好の書。 四六判・定価二〇〇〇円

# ベトナムへの道

日越貿易の  
歴史と展望

中原光信（日越貿易会元会長）著 日越貿易の中心的な役割を担ってきた著者による好評ベトナム現代史。三〇〇〇円

# コラムの闘争

注目される  
チャベック！

ジャーナリスト・カレル・チャベックの仕事——朝日「天声人語」等で紹介された話題作。田才益夫訳編。二五〇〇円

# 宮澤賢治をめぐる冒険

高木仁三郎著 高頭祥八絵（水や光や風のエゴロジ）イハートリーブ賞受賞の、まったく新しい賢治論。二二〇〇円

# 巨人 出口王仁三郎

出口京太郎著 一宗教を越えた大本教団の王仁三郎の破天荒な生涯を辿る。「現代教養文庫」増刷出来。二二〇〇円

# 巴里シネマ散歩

四六判・定価一八〇〇円



映画とパリが人生を変えた!! 著者の、もう一つの故郷パリへの憧憬と映画の愛惜を綴る感性豊かなエッセイ集。『ジモティー』風パリ散歩ガイドとしても読めます。

社会思想社 (定価税込)

〒113 東京都文京区本郷3-25 / 振替00160-2-71812 / Tel 03-3813-8101 (代表)

# いま、二〇世紀の社会主義を検証する

『社会主義論の転回』をめぐる

## 中野徹三十加藤哲郎

加藤 中野徹三さんの「社会主義像の転回」という、三一書房からこの度出ました書物を素材にしながら、現代の社会主義の問題点について討論していきたいと思います。

「社会主義像の転回」という本は、中野さんがいわば満を持して出された本でしょう。ことしは戦後五〇年です。日本の戦後の社会科学や哲学に非常に大きな影響を与えてきたソ連型の社会主義が崩壊し、マルクス・レーニン主義の問題性が白日にさらされました。ベルリンの壁が一九八九年に崩れ、九一年にソ連邦が解体しました。その起点となったのが、ちょうど一〇年前のゴルバチョフのソ連共産党書記長としての登場でした。

従って日本の戦後五〇年を考える際にも、社会主義という、少なくとも戦後日本の前半期、五〇年のうちの二五年間、非常に大きな影響力を持っていた思想の回顧が重要な問題であろうと思います。

まず中野さんの方から、この本をお書きになるに至った問題

意識、ここで今何を提起したかったのかについて、ざっくりばらんにお話し頂ければと思います。

### 社会主義論者の責任の問題

中野 加藤さんとは昔、加藤さんが大月書店の編集部におられたときに藤井一行さんたちと「スターリン問題研究序説」という本を七七年に出してもらったことがあります。とりわけ今回は、八九年の東欧革命、この時の巨大な衝撃に直面して、スターリン批判を進めてきたこれまでの仕事だけでは到底足りない、改めて痛切に自覚させられたことがその契機です。マルクスの理論そのもの、あるいはレーニンとロシア革命にまで遡って徹底的に批判的に検討するということが我々の課題だと考えたわけですね。

またこのあたりは前書きの二二、三ページに書いていますが、やはり東欧革命の前後に、マルクス主義の立場でこれまで社会

科学や人文科学をやってきた者は皆、ある面では五〇年前の敗戦直後に、日本の大多数の学者や教師が直面していた事態よりももっと大きい、一つの道義的責任といえますか、理論的責任を負っているということを、痛切に感じたということも主体的要因になっています。

戦中期までの人たちの場合は、その時代の支配的な国論に反対すること自体が直ちに法に背く犯罪として追及されたんですが、少なくとも戦後はそういう意味での研究や言論については自由になった。それだけに理論についての個人の責任というのは一層重いわけですが、この五、六年の経過を見ても分かりますけれども、日本の社会主義論者の間では、今まで自分たちが唱えていた「自説」をいとも簡単に取り替えちゃう、あるいは頼かむりして済ませるといふ傾向が、実に強い。この途方もない思想的無責任を我々自身も他人事としてではなく自分の問題として考えていかなかったら、理論家なり思想をやる者としてはその第一前提が崩壊すると思います。いま最初に問われているのは、これまでマルクス主義や社会主義などを何らかの形で自分の所説の基礎にすえてきた人間たちすべての主体の問題です。

加藤 序文の言葉でいえば「過去の自己の言説についての道義的責任」を自ら引き受ける姿勢というふうに考えて宜しいですか。

中野 大学の教師としては、書いてきたことばかりでなく、教壇でしゃべってきたことなどにも、すべての学生に責任を負っ

ているのです。スターリン主義批判という点ではかなり早くから、四〇年ぐらい前の大学院生の頃から取り組んできたのですが、それで免責だなどとは到底いえません。

### 戦後のスターリン主義体験から

加藤 確かスターリン主義美学の批判でしたな。

中野 「マルクス主義美学の根本問題」という題で、五九年の「思想」に出したのが最初ですけれども。

加藤 ただ前書きを読みますと、もう少し前の時期といえますか、「古典的スターリン時代の末期にコミンフォルム日本支部」といつてよい組織の一員として学生期を過ごした私」という話も出てきます。中野さん自身のスターリン主義体験が、恐らくもう一つベシッくなトーンになっているのではと推察するんですけれども。

中野 その点はずっと詳しく書きたかったんですけども前書きで長く書けなかつたので、ここでもう一度要点を述べさせてもらいます。私は五〇年前には仙台の陸軍幼年学校に入つて一年生でした。今年の四月に仙台陸軍幼年学校の四九期生の入学五〇周年記念のパーティーがあつて、何十人が集まりまして五〇年ぶりの話を交わしたんです。

オウム事件でよく名前の出てくる弁護士遠藤誠君、彼も同期なんです。同じ訓育班で前から手紙を交わしたりいろいろな資料を送つてもらつたりしていますが、今回は彼は忙しくて来ていませんでした。

加藤 いわゆる軍国少年だったということになるんですか。

中野 親父が軍人だったということもあって。北大にいた兄貴が、左傾化してしましてね。日本共産党の北大細胞の草分け的な存在で、中学に帰ってきてから兄貴に巧妙に説得され、また実際に我々が聞かされていたことがいかに嘘と歪曲に満ちていたものであったかを知って、私自身も急速にマルクス主義や社会主義に関心を持ったんです。四八年に北大に入るとほとんど同時に北大の学生細胞に入ったわけです。

加藤 四八年というと、全学連の結成の直前ぐらいでしょうか。中野 その直後です。全学連は四七年ぐらいにできていますから。北大の、旧制の予科ですけどね、入って間もなく戦後初めてのストライキ、授業料値上げ反対のストライキをやったのを記憶しています。

ただ入ってすぐ、疑問を持つことがたくさんありました。その当時の党组织なんていうのは民主主義のかけらもないもので、委員の選挙など、した記憶はまったくありません。会議は、地方委員や細胞の主なメンバーが、党の決定をどう理解すべきかをどうとうと演説し、私たちはひたすら拝聴させられるのが、ふつうでした。しかもそのうちに五〇年問題、分裂。北海道はほとんどがいわゆる主流派です。

その中で起こったのが、いわゆる白鳥事件などをピークにするところの、一連の極左冒険主義とそれを理由にした弾圧ですね。

加藤 序文に書いてある「スターリンの直接の指令によるとさ

れる武装革命」極左冒険主義戦術が学友たちをどんな悲惨な状況に突き落としたか」というのはそういう問題ですね。もう少し具体的にお話し頂けますか。

中野 当時は事実上、半非合法の状態でしたが、共産党の組織はいつの間にか表と裏に分けられまして、私などは、文学部に最初の自治会をつくってその初代の執行委員長とか全学自治会中央委員長ということでもつばら表の仕事ですが、それとは全く別に裏の組織がつくられ、そこにはむしろあまり経験のない人を入れて、「軍事方針」でいうさまざまな中核自衛隊的な活動に引き込んだわけですね。そのためには、家庭や職場などの重荷が少ない、学生といわゆる「ニコヨン」＝自由労働者などが、その主な担い手とされました。

その中で多くの学友たちが、例えば逮捕されて転向した者の中から検事側の証人になることを強制されて、精神に異常をきたしてしまった者もいるし、自殺したと思われる学生もいるし、また何名かは中国に密航亡命しました。まだ帰ってこない人が二人います。日中国交回復後、二十数年ぶりに何人か帰ってきて、今でも親しく付き合っている友達がありますが、やはり彼らの一度しかない人生というものが、どれほど大きく変えられたのかということ、痛いほど深く思い知らされました。この数年以前までは、彼らは中国時代の生活を、けっして具体的に語ってくれなかった。実はそれは、あの文革期という排外主義的時代を含めて日本人として過ごすという、非常に厳しい二十数年だったのです。

また私自身も、党のことをきかないプチブルだということ、友人二人と警官にあてたピラまきを命じられ、捕まつて地方公務員法違反（公務員に怠業的行為を煽動したという）の全国第一号になつたんです。

加藤 交番にピラをまきに行つたと以前聞きましたが。

中野 平和運動を弾圧するな、ということだね。私が書いたものではないんですが、北大生では戦後こういう事件で最初に起訴されました。杉之原舜一さんが弁護士で、一番では執行猶予になつたのに、「被告たちは毫も改悛の情なく」という理由で検事側が異例の控訴を行い、二番では執行猶予を外され、最高裁でそれが確定しました。それで私は、新制大学院ができた最初の年の第一学年の前半を、大学から休学してもらつて、「服役」したのです。当時の北大文学部教授会は、こういう学生の入学と休学を認めるほど、まだおほかで、私たちの運動に理解がありました。前の年の秋、大学院に進むため自治会の仕事を終わつてから卒論を書く時間を細胞に要求したところ、近い総選挙（五二年一〇月）で共産党が前進する、するとアメリカ軍が介入して全土武装蜂起になる、卒論など書く時でない、と取り囲まれて批判され、それを拒否したら、除名されました。でも十月選挙で党が全敗すると、あれは全く誤つた決定だつたと細胞委員会が謝つてきて、活動に復帰したのです。いつ最高裁から通知が来て収監されるかわからない、私よりも私の親にとつて不安と苦しみの日々でのことですが、当時の私にとつては、党から切り離された二カ月間は、別の種類の地獄の季節で

もあつたわけです。

### スターリン主義の実践と哲学の間

加藤 その後のプロセスとして、中野さんが哲学なり美学を学問研究の対象として選択することと、それはどういつながりがあるんでしょうか。

中野 最近出たお茶の水書房の「エンゲルスと現代」に書いた「エンゲルスの哲学とマルクスの哲学」でも少し触れたんですが、私は入党前後から思想史を研究したいという気があつて、その場合思想を外にある客観的な体系として研究するというよりも、それが自分の思想としてどうか、ということが一番気になりました。とにかく自分の生き方、思想の主体性といった問題について非常に強く考えるところがありました。ちょうどその頃、戦後の主体性論争が、盛んに行なわれていました。

加藤 梅本克己さんとか真下信一さんとかの頃ですね。

中野 非常に活発な論議がありました。「月刊フォーラム」九五五年九月号の、「戦後五〇年」と社会主義論の現時点」という小論でも書いたんですが、もしこの点で本当に主体的に掘り下げられているような運動なり組織であつたとすれば、その後は大分違つてきたと思うんですが。だが主体性論は反唯物論、反マルクス主義だということで結局は厳しく糾弾され排除されてしまふ。そして主体性論争がほとんど党派的に潰されてしまつたあとに、スターリン主義の問題が出てくる。

加藤 五六年のいわゆるスターリン批判のときは、もう大学院

に。

中野 大学院のD・C（博士課程）に入った年ですね。

加藤 哲学、美学を専攻と定めていらっしやったんですか。

中野 卒論とマスター論文で初期マルクスを取り扱ったんですが、その時期にはじめて「経済学・哲学草稿」などに触れて、ああいうマルクスの哲学と、その当時のマルクス・レーニン主義の哲学の間にある、ほとんど架橋できないほどの断絶に驚き、それをどういふふうにかえたらよいかという問題を意識していました。それで初期のマルクスから一貫した系統的な、通説にこだわらない説明をやってみようかと決心したわけです。

またそこでの主・客の論理、主体の対象化とか疎外という視角が、当時のマルクス主義の美学などの非常に不毛な議論を創造的に変えていくのに最も基本的な枠組みを提供してくれるだろうという、予測もありました。プロ独論などの政治理論よりも、マルクス・レーニン主義哲学の人間不在の論理と、先ほど体験したあの非人間的な実践とは、恐らく同根のものにちがいない、その原理的なあるいは思想的な地盤みたいなのを、自分としては説明していきたいと考えた次第です。

加藤 私のように政治学をやっていますと、当時のスターリン批判後のマルクス主義というと、例えば平和共存とかイタリアの構造改革とか、あるいはグラムシ思想の流入とかがパツと思ひ浮かぶわけですが、中野さんの場合にはさらに根底にあるマルクス自身の思想を再検討しようという構えになられたと了解して宜しいでしょうか。

中野 さしあたってはマルクス自身の思想の再構成から出発して、マルクス・レーニン主義哲学のペレストロイカといいますか、そのつくり直しをしなければ駄目だ、と。

加藤 「思想」（一九五九年二月）の「マルクス主義美学の根本問題」でしたか、中野さんの処女論文だと、「ドイツ・イデオロギー」の解釈、フォイエルバッハ・テーゼのあたりから始まりますね。先ほどの学生時代の体験、あるいはその前の軍国少年としての体験とつなぎ合わせると、主体の在り方、そもそも主体とは何かという問題に対する中野さんなりの解答を出したかったということになるんでしょうか。

中野 そういつていいんじゃないかと思います。当時私どもが学んだ「マルクス・レーニン主義哲学」では、認識論の分野では存在とその反映としての意識という、哲学的な反映論と称するものがすべてでした。史的唯物論の分野では土台と上部構造とか、生産力と生産関係というようなカテゴリーがあるだけで、トータルな生きた人間とその活動をトータルにつかんでいく論理が、どこにもない。悩める主体など、入る余地はまったくない。

これとスターリン主義の非人間的な実践の構造とはどこかでつながっているはずですが、またこの哲学の唯物論も結局は、人間を無限に素材化し、利用し尽くしては捨ててゆく、こういうスターリン主義的实践と無関係ではないはずだということも、強く意識されました。

とりわけ美学の分野では反映論の不毛性がはっきりしてきて、

人間的主体のかかわりなしに美の成立はないはずだということ  
を自分で主体的に確認した時、この哲学の批判の原点がつかめ  
たわけです。

加藤 そのへんの問題は、私も最近は大スターリンに粛清された  
日本人の研究の系列から関心をもっています。国崎定洞の粛清  
を研究し始めたら、周りに文学者がいっぱいいるものですから  
文学者、芸術家、美術家、千田是也、勝本清一郎を始めとした  
人たちなんです。そこを研究すると、社会主義リアリズムと  
か、とりわけ二〇年代末から三〇年代初頭の日本のプロレタリ  
ア文化運動、蔵原惟人のテーゼとか、宮本顕治の芸術論と問題  
がダブってくるんです。

中野さんのそういう問題提起に対する当時の、ちょうど六〇  
年安保の前後と思いますが、マルクス主義陣営の内部での反応、  
リアクションはどうだったのでしょうか。

中野 六〇年前後ですからフルシチョフ時代です。ソ連の方は  
雪融けで生き生きと動き始めていて、私自身もこの時期のソビ  
エトの美学論争などに本当に希望が感じられたんですけど、日  
本の場合はそれよりも遥かに遅れているといえますか、ほとん  
どそういう動きはなく、私の論文は観念論的な修正主義だとい  
う一言で、その頃の共産党の哲学者から片づけられました。で  
も少数の美学者や文化運動者からは、たいへん激励されました  
が。

その後ソ連の方でだんだん変わって、人間的意識の主体的な  
関与なしに美的事象なんてものはあり得ないという主張がソ連

で有力になると、日本でもなくすし的に論調がかわってくる。  
加藤 それを紹介するというスタイルの議論は出てくる。

中野 ええ。そしてそれによっていつの間にか、もはやそうい  
う次元は乗り越えられた、なんてことになる。

加藤 私の学生時代はちょうど大学紛争の時代ですが、あの時  
代になりますと東ドイツのコージングとかザイデルの哲学体系  
が紹介されて、実践的唯物論という言い方が日本の哲学界に入  
ってくるのを僕らは横目で見ていたんです。するとそれ以前の  
段階の日本の唯物論、マルクス主義哲学ないし美学、社会思想  
の分野では、どちらかというソ連や東独等々での理論状況をつ  
紹介することに熱心で、まだそこで提起されていない問題につ  
いて語ると何らかのレッテルが張られるという状況と考えると宜  
しいんですか。

中野 そう思いますね。しかもその頃はもうスターリン批判以  
後だというのに、共産党という政党が思想や理論の分野の指導  
性を持たなくちゃならないということを、共産党の幹部がまだ  
公然と語り、そしてそれほど不思議に思われない雰囲気でした。  
加藤 いわゆる綱領論争、中ソ論争、そして日本の第二次唯研  
というんですか、戦後の唯物論研究会が分裂しますね。あの時  
期にも中野さんは何らかの形でかかわっているんでしょうか。

中野 唯研の分裂には、別にかかわっておりません。

加藤 そのへんのマルクス主義哲学の原理的な問題と、それか  
ら中野さんの今度の本につながってくるマルクス主義と自由の  
問題とか、あるいはプロレタリア独裁の問題とかとはどう関わ

るのですか。社会主義のイメージと私はいつているんですが、原理的なレベルの問題と、現実の資本主義の否定型としての社会主義の在り方の問題は、中野さんの中ではどのように統一されていたのか、あるいは基礎づけられていらつしやったんでしようか。

中野 やはり原点にあったのは先ほどのような、私自身も含めて当時の学友たち、その頃の世代の人たちが多かれ少なかれ体験したはずの日本的なスターリン主義体験ですね。従って我々が目指す社会主義はそういうものとは違うはずである。その頃はまだ、人間の顔をした云々という言葉は出ていなかったけれども、人間の自由と民主主義を真の意味で実現する、それに基づいた社会主義でなければならぬということは、ほぼ自明のことだったわけです。このあたりは季刊「窓」(四一七号)に連載した「日本共産党はどこへ行くのか」などでもやや詳しく触れたことですが、六〇年の前、日本共産党でいうと第七回大会前後ですか、その頃は共産党としては空前絶後の比較的自由な論争ができた時期で、私なども自由な社会主義の理論構築も実践的な展開も可能ではないかというかなりの樂觀を持って、それなりに機関紙で議論していったという事実があります。

加藤 網領討論のための「団結と前進」が出ていた時代ですね。

中野 私の考えとしては、イタリア共産党の構造改革路線が一番びつたりしているときで、広範な民主主義的な課題、民族の完全な独立を含めて、そういうものを過渡的な段階において実現しつつ、しかもそれを踏まえて行われる新しい社会主義革命

という立場でした。それは七回大会前後の議論でしたが、八回大会準備期になると党内の言論と代議員選出の強烈的統制が行なわれ、宮本派の綱領が満場一致で採択されるということになってからは、民主的な論争はまったくできなくなる。その時には、党から抜けようかと思つて、大分悩みました。

### 「プロレタリア独裁」論をめぐる党内闘争

加藤 今度の本でもプロレタリア独裁の問題を書いていらつしやる。プロレタリア独裁とか、現実のソ連社会主義についての当時の中野さんの評価、これもその後変わってきたと考へて宜しいのでしょうか。六〇年代以降、スターリン批判から綱領論争や唯物論研究会の分裂等々を経て七〇年代へという大きな流れの中でですか。

中野 こういうわけで共産党の中央には強い不信を抱いてはいましたが、内部での議論は徹底的に自由に、職場では一番困難なところを進んで担つて党外の人々と民主的に進める、選挙でも支持を集める、という点では、私たちの支部はどこにも負けないものでした。七〇年代になって先進国革命の路線が提起された時には、これで運動も理論も民主的につくり直せるという期待が生まれました。「マルクス主義と人間の自由」を青木書店から出した頃ですが、この時にプロ独の問題が出てきたのです。

加藤 不破哲三氏の提起した訳語問題ですね。

中野 それは不破さんが個人論文として発表したものですし、

当然自由に批判してもいいはずですが、どう考えても不破さんの展開した根拠はおかしいという結論になりました。

**加藤** あれは独裁からカタカナのディクタトゥーラないし執権と訳語を変えろという形で問題が提起された。

**中野** マルクス・エンゲルスのいう「プロレタリア独裁」という概念は、暴力革命、革命の軍事的・暴力的な形態などとは無関係であり、それは権力の掌握と等しいのであるから執権の訳語がふさわしい、だが同意語であるからわざわざ執権という言葉を使うこともない、権力の掌握でいいということですね。

**加藤** 労働者階級の権力と言ひ換えられるという論法でしたな。  
**中野** しかしマルクスの理論を理論史的に研究している者からすれば、これはどう見てもおかしい。マルクス自身も時代の子であり一九世紀の子ですが、一九世紀の革命運動というものはすべて武力革命の形態を取ったし、また取るのが当然予想されるような状況の中で発想していたわけです。このようなマルクスたちの発言を系統的に無視して、奇妙な解釈学で彼らの立論をつくりかえる。詳しくは私の本の第一部第三章を参照していただきたいのですが、マルクスたちは当然ながら、当時のヨーロッパ語になつてゐる「独裁」の語を使つてゐます。ところが不破氏は、古代ローマのディクタトル（独裁官——不破氏はこれに執政官という訳語をあてているが、執政官は、独裁官を選ぶコンスルの定訳です）の職務にあたるディクタトゥーラを説明したのち、「マルクスとエンゲルスはこの古代ローマ以来のラテン語に新しい今日的意義を与え、科学的社会主義の国家

論、革命論の上の概念として活用しはじめた」とか、「ドイツ革命の過程で「執権」の言葉を最初にもちだしたのは、革命後に成立したプロイセン政府の首相カンブハウゼンだったらしい」などと書いています。まるで、マルクスやカンブハウゼンが、古代ローマ語から *dictatura* という語をはじめて近代ヨーロッパに移しかえたかのような珍解釈です。もちろん、カンブハウゼンが国民議會で使つてゐるのも、マルクスが使つてゐるのも、*die Diktatur* という、ごく当たり前の日常ドイツ語にすぎません。つまりマルクスたちの場合も、「超法的な・軍事力にもとづく超常的な専制的支配」という一般の語意で用いられているわけで、政治的支配一般とは当然異なります。さらに私は不破論文の批判のなかで、当時の初期社会主義思想のなかで革命的独裁が論じられてゐる例を挙げて、不破氏の誤解を正そうとしたのです。東京の友人にすすめられて、抜刷を不破氏と上田耕一郎氏にも（友人を介して）送りました。犬丸義一氏がその頃私に語つたところでは、上田さんはあれを読んで「あれには參つた。やはり空想的社会主義も勉強しなければならぬね」といつていたそうです。私は、こういう「階級独裁」の理論は一九世紀の現実から生まれたもので、二〇世紀の我々は、それを誤つて訳語問題としてなどでなく、理論問題として、正しく歴史化しなければならぬ、そうしないと現代、私たちがなぜ「階級独裁」の思想を克服せねばならないかが、はっきりしなくなる、と主張したのです。

**加藤** 不破哲三氏の「社会主義と執権問題」の問題提起をディ

クタツラ、ディクテータシップという言葉が生まれてきた初期社会主義の歴史状況の中に置き換えて考え直すという観点から見ますと、当時展開されたものでは中野さんのものと廣松渉さんのものが、私は当時まだ訳語問題で直接的な影響があった大月書店の編集部におりましたから、面白い議論といいますが、マルクスそのものを歴史の状況の中で考え直す視点を与えてくれたという意味で、非常に有意義だったんです。ただ、それが今度の本によりますと、「私に対する日本共産党中央の党規律違反追及問題の第一の素因となった」という書き方をさせていただきますね。これはどういうことでしょうか。

中野 そのあたりも、もうしゃべってもいいと思うのでしゃべるわけですが、不破氏の「科学的社会主義と執権問題」を批判したその論文を、私の大学の友人の先生だった常盤敏太さんの喜寿記念の著作集（一九七六年）に発表しました。それが規律違反に問われたのです。その理由は、その前の第二回党大会で既に、ディクタツラなる語については執権という訳語をあること、そしてその解釈についても大会決定になっているというんです。それと違った見解を党外で発表し、そしてそれに批判を加えたのが重大な党規律違反だというわけです。

私がドイツのハイデルベルク大学に留学した（一九七九年）直後に出しました「マルクス主義の現代的探求」（青木書店）には、この論文を再録するとともに、この頃の不破氏による田口富久治氏の論文に対する批判の仕方もひどいものだったので、それに対する批判論文も書きおろして収めました。この両者を

併せて重大な規律違反だということで私に対する追及がドイツに行っている間に始まり、帰ってきてからも続けられた。

結局それは規律違反という問題ですから、私の所属している大学の支部での討論に当然なつたわけです。その支部の大多数は処分は不当だということで反論し、多くの人たちがそういう意見を提出しました。その後は中央からもたくさんの幹部が来て、私と議論したわけですが、最後は内容が問題ではない、しかし党の決定を批判した論文を党外に出したことだけはまずいと、それだけは自己批判してくれということになりました。

しかし当時の宮本委員長や不破書記局長は、「執権問題」などという理論問題は学問的な問題であり、大会での決議その他で解決したということと今後にわたって閉鎖的な措置を講ずることはないとか、学問の自由は侵害しないということを天下に公言していたのです。しかもその時は「自由と民主主義の宣言」を採択して大々的に宣伝しながら、陰ではこういうことをやっているわけで、それを認めることはこういうことを宣言した党にとってよくないことです。また学者の良心としても、これは認めたい。言論や学問の自由を認める以上、党幹部の論文であれ党の決定であれ、どんなタブーも認めてはならない。

それで技術的な点はいくら自己批判しても宜しいけれど、原理については譲らないという姿勢を貫いたんですが、それで切れないものですから、今度はまったく別の不当ないがかりぞ持ち出してきた。でもそれでもだめなので、支部の討議を禁止して特別の場合には一級上の機関で処分できるといふ規約の非

常事態条項を使って、北海道委員会の決定ということで、私の排除を強行した、ということが真相です。

これは一九八四年ですから、まさに「オーウェルの年」でした。私は一九四八年に入党したんですが、この年に彼が四八をひっくり返して「一九八四年」を書いた。私にとって、本当にオーウェルの世界の体験でした。

加藤 それが中野さんにとつての、もう一つの大きなスターリン主義体験ということになるんでしょうか。

中野 そういうことになります。

加藤 ただ、このプロレタリア独裁の問題で今度の書物では、例えばカウツキーとレーニンを対比しながらどちらが背教者だったのかという問題提起がされている。マルクスばかりではなくて、レーニンプロレタリア独裁論をも歴史的状况の中に改めて位置付けるということとともに、今日の時点、中野さんが生きてきた時代においてプロレタリア独裁という概念がどのような意味があるのかということについても歴史的に検証されています。そのへんのポイントを一言で言っただけです。

中野 第一部の第二章「社会民主主義と共産主義の問題」から第三章の「ロシア革命を巡るカウツキーとレーニン」、主にこの二章にまたがる部分です。簡単に申しまして、マルクスの独裁や民主主義の問題という点についていえば、マルクスの思想と理論そのものの中に、一つはロシア革命やレーニン、ボリシエビキに受け継がれる側面と、カウツキーやその他西欧の社会

民主主義に継承される側面という、二つの面がある。これは「マルクス・エンゲルスと二つの民主主義の概念」というところで展開しています。両者はある意味ではマルクスの理論が異なった二つの母胎で受胎し、生み出された異母兄弟だ、ともいえましよう。

ともあれ、プロレタリア独裁という概念と不可分であるような革命の在り方なり、あるいは社会の在り方についてのマルクス・レーニン主義的発想は、我々の社会の民主的な変革、現代における社会主義を考える場合には、ずっと前から本来放棄されるべきものであった、と思っただけです。

加藤 一九世紀の後半というのは、私の専攻する政治学ないし政治史の世界でいえば、ちょうど普通選挙権要求がようやくイギリスから始まってヨーロッパに広がっていく時点です。その時点ではまだ女性が排除されていますから、政治のシステムは基本的には教養と財産のある男性市民たちによって支配されている、実質的に労働者や農民の参加の権利も限定されている。

そういう時代に、その歴史的な限界の中で社会主義を実現していくという志向の中から生まれてきた戦略ないし戦術という次元でプロレタリア独裁の問題はとらえるべきだ、私はそう理解しているわけです。

中野 そういうふうにとらえて宜しいんじゃないかと思えます。またここでは、「主体」はもっぱら階級として、単次元的にとらえられています。

## マルクスを原理から問い直すこと

加藤 それは当然、その後のロシア革命の評価という問題にながつてくる。その前に「社会主義像の転回」の中ではマルクスの社会主義論そのものを様々な形で読み直すという作業が行われているように思われますし、その際いわゆる初期マルクスに相当詳しく光を当てられているように読めるんですけど、今回の本でのマルクスの社会主義論のポイントというのと、どういうことでしょうか。

中野 この本では第一部の第一章「コミンテルン創立期の戦略展望とその基礎理論上の諸問題」と、第二部の第二章「ソ連型社会主義の崩壊は何を教えるか？」がそれに当たります。

第一部第一章のマルクスの部分は私が一番苦労したところですが、それは私自身が今までそれなりにマルクスをとらえてきた見方自体をも、やはりその曖昧さなり誤りなどを含めて、自分でそれを切開しなければならなかったため、だろうと思いません。書かれたのが八九年の暮れから九〇年春、「労働運動研究」に連載し始めた最初の二号分ですが、この時期にはまだソ連は一応ソ連として存在しており、いわゆる市場経済への移行が問題になった時期ですが、商品交換や貨幣の廃絶という、今までのマルクス主義的な社会主義の常識になっていたもの、かねてから莫とした疑問を持ちながらもあまり追究していなかった問題を、今度は正面から考えなければならなくなりました。

加藤 今度の本の表現でいいですよ、「私の所有、階級関係と

商品貨幣関係、政治的国家という人間の疎外の三位一体の同時的廃絶が実現し、自由な生産者の共同社会が生まれ、人間社会の歴史が終わる、というのがマルクスが描いた壮大な人間解放の図式だった」とまとめられています。これ自体を問題にするという視点に立たれたわけですね。

中野 もう一度マルクスをはじめから読み直して見ると、商品貨幣関係の廃絶という命題は、「哲学の貧困」のところで初めて理論的に明確になっているということが、自分なりに確認できました。この点は、私の論文が初めて明確にしたところです。

加藤 一八四七年ですか。

中野 そうです。この本でマルクスは、階級対立なしには私的交換もありえない、ということをはっきり述べている。しかし実は四三年の「ユダヤ人問題によせて」のなかで、原理的にはつまり哲学的コミニズム成立の時点ですでに、私的所有的廃絶と商品・貨幣関係の廃絶が語られています。それと、市民社会の上に自立した政治的国家の廃絶が、出てくる。

加藤 今度の本では「階級還元主義的な哲学的共産主義の原理」という言い方がされていますね。私はネオ・マルクス主義とかポスト・マルクス主義という、西欧マルクス主義の系譜の方から階級還元主義批判を展開してきました。それは、主としてレーニン、あるいはレーニン以降のスターリンを含む正統派マルクス主義の流れに対する批判の視点としてですけども。中野さんの今度の本では、初期マルクスからそれは貫かれていたんだという批判点が出されているので、ちょっとびっくりし

ました。

そもそもそうすると、私的所有の廃絶とか商品・貨幣関係の「廃絶」という構想自体がある種のユートピアであったということになるのでしょうか。

**中野** 基本的にはそう考えざるを得ないと、私は思います。その理論の可否の問題はともあれ、彼が本格的な理論研究、経済学研究や歴史研究を始める遙か以前に、社会主義像についてのマルクスの原理的なイメージが、まず存在した。後の研究の長い歴史を通じて、「ゴータ綱領批判」を含めて、その原理についてはまったく変更はありません。

その点に、他の多くの社会主義者とも共有するところの、彼の社会主義像の一九世紀的性格があるんだと、私は考えています。しかも非常に強烈な思想家の常として、まずイメージありきですね。そのイメージなり思想によって、理論の構築も強引に規定されますが、そのことは新しいMEGA（『マルクス・エンゲルス全集』）を読むと、よくわかります。

**加藤** そうするとそれは、唯物弁証法とか、疎外論とか物象化論とか、マルクスの方法そのものに内在する問題と了解して宜しいのでしょうか。

**中野** そうじゃないかと思えますね。そこをどういうふうに読んでいくかということですが。この間私の大学で私の本の合評会をやったときにある評者がいつておりましたが、マルクスの理論を支えているメタ・ロジックというか、論理を超えたもの、このあたりに光を当てていく必要を、私の本を読んで非常に痛

感したと、いつておりました。彼は社会学者ですけど、私にとっても大変興味深い発言でした。

このことと関連して、私はこの本でマックス・ウエーバーの宗教社会学の概念を借りて、マルクスの歴史哲学には、ウエーバーのいう「苦難の神義論」の唯物論版といていいものがある、と書きました。神があるのに、なぜ人々が苦しまなければならないか。人民の苦難と疎外とは、結局はその極限に到来する真の救いと解放によって、そこにある神の義が証示されるという神義論。これはマルクスがユダヤ人だったということとどうかかわるかは別として、古代ユダヤ教にまず現われます。

ヘーゲルの世界史も、やはり「世界における神の進行」ですから、神義論的構成を持ちますが、彼の場合は自由の段階的実現ですけれども、マルクスの場合は、それは自由の否定の極限的進行と統一されて進行する。

それで私は、マルクス主義的神義論的方法論的原理は、否定の否定の弁証法と、疎外論との結合である、ととらえたわけです。

**加藤** 私などは最近ではエコロジー（生態学）とかエルゴロジー（働態学）の視点を採用しています。過労死の問題とか現代日本の社会状況を批判する視点を考えていきますと、むしろ一九世紀後半のマルクスの理論構成の段階というのは、例えばダーウインの進化論とか、進歩主義、科学主義の時代であり、万国博覧会の展示に象徴される新しい商品が次々に生まれてきて、それが科学技術の発展、機械制大工業の発展によって次々に実

現されていくという、ある種の生産力崇拜ともいいえますが、科学主義的な時代であったことが気にかかります。

例えば個体、身体に引き付けて言いますと、「全面的に発達した諸個人」という理念とか、あるいは唯物史観の単線発展段階と呼ばれる側面、そして中野さんの自由論でも批判されていますけれども、「自由とは必然性の洞察である」というヘーゲルの命題が無批判にひかれています。あるいは一方で「労働日の短縮こそが自由の根本条件である」といいながら、他方でゴータ綱領批判などに見られるように「欲求に応じた分配」の原理を出す。生産力が全面的に開花して溢れるばかりの富が出てくる、というようなユートピアが気にかかる。そういう生産力主義的な、あるいは科学主義的なマルクスというところさえ方についてはどう思われますか。

**中野** 加藤さんのいわれる点は大変よく分かるんですが、先ほど私は、マルクスの社会主義像の原理は初期から晩年まで、原理としては変わらなかったといいましたが、初期のマルクスにおいては、今いわれた側面はまだ比較的弱いですね。

**加藤** ヒューマニスト・マルクスというイメージですね。

**中野** だが彼はのちの経済学と歴史研究を通じて、資本主義的な文明の発展を通じて初めて大工業なり世界市場が成立し、それが次の発展の物的あるいは社会的諸条件や人間的素質などをつくり出す、という面にアクセントを置くようになる。

**加藤** とりわけエンゲルスがマルクスの同志として出てきて、マルクスを祖述するというプロセスでそういう側面が強まった

という面もありますね。

**中野** そういう点は確かにその通りだと思っています。

**加藤** マルクスとエンゲルスの分業問題、マルクスとエンゲルスの同一性と相違という側面については、中野さんのお考えはどうでしょうか。

**中野** さっき出た「エンゲルスと現代」のなかの論文で両者を対照してみたわけですが、この二人の友情と協同をもし他の例と比較したならば、お互いに尊敬し合い、かつ足らざるを補いつつた関係としてはほとんど比類のないものだろう、といえると思います。二人の違いを絶対化し、マルクス・レーニン主義のすべての悪がエンゲルスにありマルクスは別だというような説も今度の本で結構あるんですけど（「マルクスの社会主義論」など）、しかしそれは別の意味での一面化だと思っています。

それを押さえた上での話ですが、しかしながらエンゲルスとマルクスの間で一番違うところは、マルクスの場合にはヘーゲル哲学との対決を通じてヘーゲルから吸収した主体と客体の弁証法、主体の対象化、疎外の論理というものを遥かに深く自分のものにしていったのに対して、エンゲルスの場合はその点が非常に弱い。エンゲルス自身はキリスト教の影響から脱却するに当たって、ヘーゲル的な理念の汎神論に強く惹かれていくわけで、この汎神論的な世界のうちに自然も人間社会も統一させるとらえる傾向は、生涯続いています。こういったものが彼の自然弁証法論の背景になっており、人間と人間社会との自然主義的解釈も、ここから生じます。でもこの傾向は、同じ一九世

紀に生きたマルクスにもあるわけで、この対立を不当に絶対化してはならないと思います〔思想と現代〕四〇号の中野論文参照。

加藤 そうするとマルクスとエンゲルスの違いを過度に強調するのも問題が出てくるわけですね。例えば最近のフォーラム90sなんかでの議論ですと、アソシエーションという概念をマルクスからひいてきて、ここにこそマルクスの社会主義像のポイントがあったんだ、という議論がみられます。マルクスとエンゲルスは違うんだ、初期マルクスから資本論まで一貫するマルクスの思想としてアソシエーションないしはアソシエーションがあった、マルクス主義の本来の理念はそういうものであったのだということでもマルクスを救い上げようという考え方が「月刊フォーラム」の誌上でも展開されているわけですが、それについてのの中野さんの考えを聞きたいと思います。

中野 そういう展開の一つに田畑稔さんの「マルクスとアソシエーション」(新泉社)があり、私は私の本の二五二ページから三、四ページに渡って批判を書いたんですけど、同じような考えをずいぶんいろんな人が述べていまして、例えば「情況」の九四年の五月号ですが、ここでは吉田憲夫氏が「マルクスの未来社会像」のなかで次のように述べていますが、これは廣松氏が最後の本の中でいっていることと同じです。吉田氏によると、「いわゆる反スターリニズムの陣営にとつては既に常識と化していることなのですが、マルクス本人は驚くべきことに共産主義社会の建設を主張しこそすれ、社会主義社会の建設、

生産手段の国有化、国营制度、国家主導による中央集権的計画経済、共産党の一元独裁、一国社会主義等々を、自らの未来社会像を構成すべきメルクマールとして積極的に主張したことは基本的にいつてない」のであり、マルクスが想定していた社会は、自由な諸個人のアソシエーションだ、とされる。

しかしもちろん、マルクスが一元独裁だとか一国社会主義なんてことをいつてないことは当然なのですが、これはアソシエーションという美しい一つの言葉で問題を逃げておるとしか私には思えないんです。というのは、マルクスの理論自身でいえますと、「共産党宣言」などでいつている自由な諸個人のアソシエーション、協同組合的な社会というものとはどう見ても矛盾する原理が他方で提起されています。共産主義の初期の段階、つまりプロレタリア独裁が存在している段階においても商品交換がなくなるといふことは「ゴータ綱領批判」でもはっきりいわれており、従つてそこでは非市場的な現物経済の諸関係のもとでのアソシエーションであつて、個々の協同組合とその連合が、こうした物的な相互交流の問題を解決せねばならない。しかもこれを媒介するものは市場ではないのであつて、また市場社会主義などという思想はもともマルクスにはなかつた。そしてそれを「媒介」しうるものは、結局中央の国家権力とならざるを得ない。そしてこの中央の権力は、先の「プロレタリア独裁」の国家権力であり、この機能を通じて、権限の国家への集中を、集権的国家経済として実現せざるをえない。これは「現存社会主義」の経験からも、いやというほど明らかにはず

です。

マルクスに「土地の国有化について」という論文があります。ここでは「生産手段の国家的集中は、……自由で平等な生産者たちの諸協同組合からなる一社会の自然的基礎となるだろう」と書いています。全生産手段を事実上自分の手に集中したプロレタリア独裁の国家が、この社会の物財の生産と分配や管理を取り扱うことになるならば、それは自由な協同組合の、ということとは自己決定が可能で、例えば自由に様々な生産物を、何を作るかとかどういう技術改良をするかとか、どういうものを社会に提供できるかといったことを自主決定できる協同組合の存在と、どうして両立可能か。

もしそれができるとすれば、そういう中央集権的な国家の利害と個々の協同組合の自由との間に、ほとんど神話的な予定調和を考えざるを得ない。マルクスが、そういうオプチミズムを持てたというのは、搾取する階級が廃絶され、そこではすべてがプロレタリアートか、その代表であり、こうして両者が、コントロールする側もされる側も同質であり、利害の上で対立が生じない、と想定したためでしょう。「国家と革命」のユートピアがああいうとてつもない独裁の現実をつくる主体的要因となった、理論のこういう責任問題をふまえることなしに、「現実社会主義」の廢墟の上と同じユートピアを重ねることは、もう許されないはずで。

### 市場と国家は死滅するか？

**加藤** 自由なアソシエーションというのは市場関係を必然的に前提するということですか。

**中野** そう考えざるを得ないと思います。協同組合が本来の意味で自由だというためには、ですね。

**加藤** 自由なアソシエーションという概念は、政治学の方に引き付けますと、分権と集権の関係とか、小規模なローカルな共同体ならばギリシャ的な直接民主主義が可能であるかもしれないけれども全社会的規模では可能であるかという問題として出てきまして、必然的に国家論のレベルにつながってくるわけです。

おそらく中野さんがそういうふうにおっしゃるのは、市場を媒介としない社会主義という考え方そのものがある種のユートピアであるという考え方と了解して宜しいんですか。

**中野** ええ。

**加藤** そうすると商品・貨幣論とか交換、市場という概念をどういうふう理解するかという問題もあるような気がするんですけど。

**中野** そのあたりは私としてもずいぶん悩んだところでもあるわけですが、というのはやはり商品や貨幣の存在する将来の社会ということとは、それまでの共産主義的常識にはなかったことです。しかし、二〇世紀の社会主義の実験は、数千万人の犠牲の上で、多くのことを教えてくれました。

解放された階級の同質性とその永続に対する信仰があったか

らこそ、同時にプロレタリアートは階級として独裁できるという階級独裁論や、従ってまた同時にその「前衛」が階級の代わりには統治し得るという代行論も生まれるわけです。しかしその代行なるものがどんな状況をつくったのかを、ここまで知った我々は、同じユートピアを無邪気に繰り返すことはできない。代行論とそれにもとづく一党独裁は、階級独裁論の必然的帰結です。

さらに、商品交換を含む交換という概念を考え直してみると、経済人類学などもそういうことをいろんな面から主張していると思います。原始社会のある段階からは、かなり古い社会を含めて、交換という行為は非常に普遍的な概念として存在している。一方的に与える、一方的に奪うということでは人間の付き合い合いというものは成り立たないわけで、それは商品交換とは違った形で名替の授与であったり、与えた損害の、補償ともなったり、様々な形で交換というのには非常に広範に存在する。この本でもいつているように、商品交換はその中の経済的な側面での一形態ととらえるべきだ、と思います。そういう意味で私は、本書で広義の「交換」は歴史貫通的な「人類学的カテゴリー」としてとらえるべきではないか、と提起したわけです。

ただもちろん市場の世界に完全に任せておけばそれでいいというふうにはけつてならないわけで、市場の人間化とか人間的な規制というものは絶対に不可欠だと思いますけれども、市場を原理的に廃絶するということは、今後の社会でますます個性化する人間的自由を否定する以外の何物でもないと思います。

そしてその意味では商品交換も含めた広義の交換という原理、これと政治的な民主主義とは恐らく不可分ではないかと思うんですが、このあたりはむしろ加藤さんに聞きたいですね。

加藤 私の議論でいけば、そもそもマルクスも近代経済学の歴史の中にあるわけです。例えば市場の概念でいえば、アテネのアゴラとか、イスラムのバザールとか、日本の市(いち)の概念とどう関わるかが気にかかる。歴史的には西欧近代よりはるか以前にさかのぼるわけです。経済人類学でいえば、中野さんの本ではモリス・ゴドリエがひかれています。カール・ポランニーの提起した互酬とか贈与の世界とか、そういうものと交換の世界を、人々の相互関係の中での様々なコミュニケーションの在り方、交通の一形態として相対化して、それをどういうふうな社会主義論の中に組入れていくのかというふうな発想の方が、私が最近考えていることからいくと近いんですね。

ただ他方で、例えばアメリカのニューレフトの理論家たち、分析的マルクス主義のジョン・レーマーが代表ですけど、日本の法人資本主義を持ってきて、株式の相互持ち合いで株主の顔が見えなくなつて、労働者も株主としては株を持てるんだからこれこそが市場社会主義の最高の形態であるという議論も出てきているわけです。その意味では例えば「ドイツ・イデオロギー」でのマルクスのフェアケールの概念、交通関係というところで彼が意味していた世界と、ハーバマスなどのコミュニケーション理論の世界を結び付けて、それをどのような形で人間の解放の理論の中にはめ込んでいくのがポイントだと思ってい

ます。

この意味ではマルクスも相対化されますし、経済学そのものも相対化される。そういう議論の筋の方が二一世紀的な人間解放の道としては、ユートピアであるとともに現実的でもあり得ると思っております。結局マルクスの時代以上に全面的に展開した二〇世紀の資本主義、現存社会主義を含めた二〇世紀の歴史というものをどう振り返るかという問題と関係してくるんだと思います。

ロシア革命の問題がそこで問題になるんですが、その前に先ほどから宿題にしています国家死滅の問題ですね。これは中野さんは今度の本では国家の死滅は否定したと考えて宜しいんでしょうか。国家死滅という理念そのものがリアリティックではないと了解して宜しいんでしょうか。

と申しますのは、私もこの本で批判されていますけれども、『東欧革命と社会主義』（花伝社）を九〇年に出したときに、私は国家の死滅ではなく廃絶だと述べました。マルクスの「社会による国家の再吸収」という、「フランスにおける内乱」草稿などにある思想の筋から、グラムシの「政治社会の市民社会による吸収」という命題につなぎました。社会の自立的な制度としてのセントラル・ガバメント（中央政府）は認めるけれど、ステートとしての国家は死滅だという議論を展開しました。

最近の「国民国家のエルゴロジ」という平凡社の本では、それを地球市民主義という空間的広がりの方の立場から、環境問題とか核兵器とかという問題を考えれば、そもそも国家とい

う近代国民国家に典型的な歴史的な政治単位、福田歓一さんの言葉でいえば「中規模の政治共同体」のレベルに権力を集中するという考え方よりも、グローバルなレベルでの地球政府みたいなものと、それからヨーロッパユニオン（EU）に代表されるようなリージョンナルなもの、今日の国家が支配しているナショナルなレベル、さらには身近なローカルなレベルというふうな、権力を重層的に分節し多層化していくような構想を出しているんです。中野さんの国家死滅ないし政治についての考え方というのは、今度の本では相当ラディカルに、むしろ国家は存続せざるを得ないという議論のような気がするんですけれども。中野 そのあたりは加藤さんの専門のところなんで、批判したときも自分としてもまだ一つの仮説みたいなどころがあるんですが、市民社会への国家の吸収が文字通り実現すると考えておられるとすれば、僕は加藤さんほもつとりアリストテックかと思っていたら、案外にユートピアンだなどと思って感心もしているんです。今年は国連五〇年ですけども、民族国家を超えた次元、あるいはもつとりリージョンナルなレベル、どちらの場合も政治権力としての現実的な根拠づけみたいなものは、最終的にはナショナルステートにあるのではないか、という感じですけども。

加藤 国家暴力の問題ということでしょうか。

中野 そうですね。それを超えた次元の機関に、ある範囲で従来の国家権力が持っていたような一種の政治的な権力が譲り渡されたり委任を受けたりすることは旧ユーゴ紛争の処理などで

もおこっており、こういう権力の重層化は「生活過程論の射程」でも強調していますが、そういう力の根源としてのネーション・ステートの存在は、容易に排除し得ないものとして残るのではないかと。

最終章でも強調したつもりですが、「市民社会による国家の吸収」傾向は、市民たちの力量が向上して、いまの公共業務のかなりの部分を市民や、民主化された企業が担うことによつて、進められます。いまのヨーロッパの市電やバスでも、乗車券の改札という日本の乗務員の仕事は、乗客が車内の改札機に入れるという、市民の自発性に委ねられています。バスも見せる必要はありません(時に検査員が回つてきて、只乗りがわかると罰金ですが)。NGOを含めて、市民の活動のレベルがますます高まるところに、将来の社会主義のありかたのひとつを見たいのですが、でも人間は、解決される以上に新しい困難な課題を不断につくり出すことを考えると、先の傾向は、けつして完結できない。こう考えると、我々は国家機構の必要と必然を前提とした上で、その民主的規制と質の向上をめざすべきじゃないか、と思うんですが。

加藤 それは例えば関野さんなんかがいう、「国家は死すともネーションは死なず」というような発想ともまた違うわけですね。今日は私は聞き手ですのであまり展開しませんが、例えば環境に対する規制はチェルノブイリの原発事故を考えますと一国レベルでは到底できない。私の場合には資本主義そのものが多国籍企業段階になっているという認識がもう一つありまし

て、要するに資本の側の国境を超えたボーダレス・エコノミーに対する民衆的規制ということを考える場合に、どうしても現在のネーション・ステート・レベルでの規制では、それこそリアリティックでもないんじゃないかというレベルの問題が入るんです。

これは同時に、ロシア革命の総括といいますが、一国社会主義の問題とも関係してきますので、ロシア革命論の方に入っていきたいと思います。

中野さんの今度の本ではコミンテルンの戦略展望というところから第一章が始まります。私もコミンテルンは本来の専門の一つなんです、主として二〇年代以降のを中心にして研究し書物にしてきましたので、中野さんばかりでなく何人かの人から書評でコミンテルンの創立期についての記述が甘いという批判を受けたりしました。中野さんの書物は、いわばロシア革命そのものを真正面から総括するという試みをなさっていて、ロシア革命の歴史過程、例えば憲法制定議会の問題等々についても相当の紙数をさいて、いわばご自分のロシア革命論を展開していますね。確か昔、「レーニン」(清水書院)という書物でロシア革命のプロセスをスケッチなさったことがあったと思うんですが、あの時ともまたちよつと違った展開になっているんじゃないかと思うんです。そのエッセンスを展開していただければ。

中野 ベレストロイカが始まって間もなく、ロシア革命が現実になどったコースは唯一のあり得たコースであつたかどうかと

いう疑問がロシアでも出され、民主主義的な道の可能性の問題についての問題提起が行われていましたが、この点は自分にもかねがね疑問があったものですから、ここで突っこんで考えてみようというところで始めたんです。

今まではああいうコースしかありえなかったとして、ロシア革命が現実には歩んだコースが絶対化されてきたわけですが、その点を相対化してありえた種々のコースを考えて見る上で、ヨッフエというソ連の歴史家の論文に大きなヒントを与えられたことがあります。一九一七年八月のボルシェヴィキの乱を統一戦線で叩き潰したという時点から二、三週間に渡って、レーニンは「ロシア革命と内戦」などいくつかの論文で、ソビエトを構成している三党、メンシエヴィキとエスエルとボリシエヴィキ、この三党の同盟と平和的な競争の可能性を考え、他の二党によりかけています。

そしてレーニンは、この三党同盟だけが、絶対に内戦を不可能にする、ともはつきりいつている。しかしその彼がこの道を取らず、ボリシエヴィキの単独武装蜂起の道を選んだのはなぜか。それは、彼らがロシア革命の生命線であり、ロシア革命がそのための手段でもあったヨーロッパ革命、特にドイツ革命が迫っている、と考え、その可能性に賭けたためではないか。

次の選挙は、十月蜂起が行なわれた直後に開かれた、第二回全ロシア労働者・兵士ソビエト大会です。メンシエヴィキ国際派のマールトフがここで先のレーニンの三党同盟に近い「全民主主義者による政府」の設立を提案し、ボリシエヴィキも賛

成してそれはいったん議決されるが、蜂起の評価をめぐる対立で、この決議も消えてしまう。これも一つの消えた可能性ではなかったかと、ヨッフエはいうわけです。

その後では蜂起後の革命後の政権構成の問題です。鉄道労働組合全国委員会の提起を受け入れて政権構成を変えたならばどうであったかという問題もありますが、とりわけ憲法制定議会選挙の結果を無視してこれを解散させたことは、ロシア革命における「民主的な道」の最終的な否定であり、内戦への道を決定づけた、重大な選択だったと考えます。私のこの本では、この問題をかなり詳しく検討したつもりですが、それはこの問題のうちに、二十世紀での社会民主主義と共産主義への社会主義の分裂、ロシア革命のスターリン主義への帰結の、かなり決定的なモメントが含まれているのではないかと考えたからです。八割の人口が農民であるロシアの変革を課題にして、しかも自分たちも「土地についての布告」を出すときにはエスエルの書いた文章を生かしたわけで、そういうことをやっていたながら農民に圧倒的な影響力を持つエスエルを完全に敵に回す方策をなぜ取ったのか。一時連合したエスエル左派とも、やがて講和の問題、食糧独裁の採用によって敵対関係に入ります。その結果は悲惨な内戦であり、この内戦がスターリン主義の土壌を決定的に準備することになる。

加藤 実私は、この問題を生前の廣松渉氏と、フォーラム90sの創設のころに二人で一晚飲みながら話したことがあります。全然意見が合わなかった点がいっぱいあるんです。

一つの考え方としては、一〇月革命、武装蜂起という権力奪取の在り方そのものが、その後のスターリン主義に道を開く契機を孕んでいたんだから、二月革命までは良かったけれども一〇月革命以降の社会主義革命以降のプロセスを否定的に見るといふ、現在のロシアに非常に強いとらえ方がありますね。

それから廣松さんなんかもそうでしたが、プロレタリア独裁、世界革命という理念に向けてのいわばやむを得ざる選択という考え方があり、これはレーニンの歴史的評価と非常に密接に結び付いているわけです。

さらにロシア史研究の人たちの考え方だと、それでも以前の帝政ロシアよりは、よくなった、と評価する。ロシアの民衆にパンを与える、パンと平和と土地というレーニンのスローガンに民衆が引かれてそれを支持していた以上、それはロシアというネーションの一つの建国のプロセスとして不可避であったんだという、日本のロシア史研究者などに多い見解だと思いますけれども。

中野さんの場合には、こういういわば大枠の選択肢ではなくて、その時々々の歴史的状況の中にもっと様々な政治的選択肢があったというところをリアルに見直すべきだという考え方だと考えて宜しいんでしょうか。

中野 十月直前にレーニンが一時構想した三党同盟を、ボリスエヴィキが一貫して追求したとすれば、どうだったのか。十月蜂起のかわりに、ソヴィエト三党を中心とした民主主義的な政権が生まれ、ロシアの民主化、土地と平和の問題に、よりよい

解決が生まれたんではないか。

また、もともとボリスエヴィキも早期実施を要求し、十月革命後自党のもとで実施した制憲議会選挙の結果を尊重して、エスエルが第一党、ボリスエヴィキが第二党の連立政権ができたらどうだったか。レーニンのソヴィエト政権自身が、自分のことを「制憲議会が召集されるまでの」「臨時労働政府」と呼んでいたのですから、これは天下の公約だったのです。もちろんいろいろなジグザグや対立、混乱は当然あったにせよ、ロシアの歴史をはじめての憲法体制のもとで、経済の混乱も收拾に向かった可能性はあるし、この政権はソヴィエトが母胎になって生まれたのだから、憲法でもソヴィエトを位置づけた、ドイツのワイマール憲法以上にユニークな勤労者民主主義の体制となった可能性もある。

何よりも、内戦が回避された（外国の干渉もできにくい）だろう、ということ。ロシアの内戦は、ロシアの歴史家ポリヤークอฟの（革命七〇周年の）評価でも、西側の最初の本格的な内戦研究書といわれるエヴァン・モーズリーの本によっても、死者およそ一〇〇〇万人、うち市民七〇〇万人という、想像を絶する犠牲を、ロシアの人民に強いたのであります。この数字は、第一次大戦での、ロシアを含めての全交戦国の死者総数（八五三万人）をさえ、上回っています。そのほかに、多数のインテリゲンチアを含む三〇〇万人が、亡命したり移住したりで、ロシアを去りました。このたいへんな犠牲、モーズリーは「ヨーロッパがそれまでに体験した最大の国民的悲劇」といっています。

これを体制変革のためのやむをえない犠牲と見るのか、どうかです。ここで問われるのは、革命家の責任であり、歴史家の人問性です。

### レーニンをどう評価するか

加藤 最近出ましたヴォルコゴノフの「レーニン」(英語版)を読みますと、今までクレムリンの奥深くに眠っていたレーニン全集にも入っていなかった三七二四点のレーニンの手紙とか政治的な指令その他が出ています。彼はロシア・ナシヨナリズムの観点から、むしろ帝政時代の大ロシア主義に近い視点からこの伝記を書いていますので、全体の調子には私は賛成できないですけれども、史料的には貴重なものです。ただし、NHK出版から出た邦訳は出典を明示した注が全部省略されていて学術的価値がそこなわれていますが。

事実としては、いわゆる内戦の初期からレーニンがテロルに頼って農民を統制する、あるいは異端派、反対派、さらには他党派、つまりエスエル左派などの人々を秘密警察チェカも使いながら政治的に抑圧していく有り様が非常にリアルに描かれている。その意味では中野さんがおっしゃったロシア革命におけるイフ(iff)、時々の選択肢の問題というところで私も重要なんですけど、確か中野さんに「社会主義像の転回」を頂いたときに感想を送りまして、その中では、しかしまだロシア革命史の評価はやや甘いんじゃないかというふうな書き方をしました。結局それは政治指導者としてのレーニンをどういうふう

総体として評価するかという問題になってくるんだと思うんです。

中野 甘いといわれたのは？

加藤 甘いというのは歴史的記述と評価について若干の疑問ありということですよ。ロシア史の記述そのものがこれから新しい段階に入る。既にもう刊行が始まりましたが、クレムリンの秘密史料約七五〇〇万点がでてきている。そういう新しい史料にもとづいてロシア革命像をこれから再構成しなければいけないという段階で、やはりレーニンという政治指導者をどのように評価するかという問題が決定的であると思うんです。

理論としてのレーニン主義の問題については、中野さんは昔から、例えば「唯物論と経験批判論」に対する批判をやられている。私も「哲学ノート」と「唯物論と経験批判論」を比べたらヘーゲルに近いだけ「哲学ノート」の方が面白いということを書いたことがあるんです。

しかし、政治指導者としてのレーニンについては、政治学者の中でも実は非常に意見が分かれる。つまり政治的リアリストとしてのレーニンという見方が一方にあり、他方でユートピアンとしてのレーニンという評価がある。特に「国家と革命」が問題になる。私は両方の側面でレーニンを批判してきました。「国家と革命」の問題点は「東欧革命と社会主義」(花伝社)に詳しく書いたことがあります。政治的リアリストという観点から見た場合でも、その局面その局面での権力政治、つまりプロレタリア独裁を維持するという政治目的にかなったという意

味ではリアルであったと認めますけれども、しかしその評価については、ここが廣松さんと一八〇度違っていたところなんです。むしろ今日の視点からの評価からいえば、民衆政治家としてのレーニン是非常に問題があったのではないか。つまりスターリン主義に通じる政治手法というものが非常に早くから、ボリシェビキ党の結成の時点から孕まれていたんではないかという、非常に辛い評価をしています。レーニンの組織論・国家論については私はきわめて否定的な評価をしてきているわけです。その点からいいますと、中野さんの今日の時点でのレーニン評価というのはどうなるんでしょうか。

中野 「トロツキー研究」六・八号で私が紹介・検討しましたトロツキーの最近発見された三〇年代の哲学ノート、ここには「レーニンがアバラート（機権）をつくった。アバラートがスターリンをつくった」というエピソードがありますが、これはトロツキー自身がそれに負わせた以上の意味を持っていた、と思うんです。少なくとも、スターリン主義が生まれてくる危険に対する点では全然リアルでなかった。

ヴォルコゴノフの「レーニン」は、私も最近読んで、改めて大きなショックを受けました。ここには、世界革命という目的のためには、どんなモラルも問題にしない、レーニンやボリシェヴィキの態度が、未公開の資料でいやというほど語られています。革命後の一九一八年六月にも、ロシアが秘密ルートでドイツ政府から月々三〇〇万マルクの資金を受け取っている史料もある。内戦による大飢饉でアメリカから食糧援助を受けてい

た二三年に、大量の穀物を輸出したり、帝室や貴族や教会から奪った貴金属や宝石を、大量に各国の政党や個人にばらまいている史料もありましたが、そのなかにはかのジョン・リードの名もあります。私は自分の本でレーニン主義の本質的特徴のひとつが「革命的独裁＝暴力への直截な依存にある」と書いたのですが、テロルについてのレーニンの指示の数々を読むと、やり切れない思いがします。革命前は労働者と農民の連合独裁を語りながら、革命後は農民に対する食糧独裁を簡単に実施する。この内戦の論理が、やがてスターリンの粛清や集団化の論理につながってゆく。それと、工業化への無限の信頼。「共産主義は、ソヴィエト権力プラス全国の電化である」という有名な言葉は、レーニンが信頼する力の性質を、端的に語っているような気がします。

加藤 私の観点からいうと、それもまさにエコロジ的・エルゴロジ的発想の欠如ということになります。やはり電化と機関車によって組織される社会主義であり、国家的規模での工業化シンジケートというイメージがある。これはマルクスにまで遡る問題、あるいは近代そのものに孕まれた問題といってもいいかもしれないですけれども。それをいわば戦略・戦術的に極めて強引に展開したのが国家論のレーニンの段階であると評価しているのです。それをさらに極端化したのがスターリンということにおそらくはなるんだらうと思います。

スターリン主義の問題は最初のところでお話を聞きましたので繰り返しませんけれども、そこで粛清のロジックとか、ある

いは唯一前衛党とか、民主集中制とかです。九一年のソ連解体の根拠になる、あるいは国際共産主義運動の壊滅の根拠になる様々なロジックというものがレーニンの死後に構成されて、それが社会主義と自称し、冷戦期のロジックでいえばまさに世界史的な対抗としての一方の極ということで二〇世紀が存在してきた。最近のホプスボームの書物の表現を借りれば、一九九一年に短い二〇世紀は終わってしまったという形になっているわけですね。

その現存した社会主義——私は現存する社会主義というパターンの言い方を過去型で使って「現存した」というふうにするわけですけれども——のトータルな歴史的な評価はどうなるのでしょうか。「月刊フォーラム」誌上での議論の流れからいけば、あれをどのような性格の社会として認識するかというレベルでは、中野さんの今度の本はどのへんに位置するのか。例えば国家社会主義説とか国家資本主義説とか、あるいはトロツキーの歪められた労働者国家とかという規定がありますね。私は国家主義的社会主義という言い方をしてみましたけれども、中野さんの場合はどういう総括的评价になるのでしょうか。

### 「現存した社会主義」をどうとらえるべきか

中野 その点も随分いろいろと考えたんですけども、二六〇ページでこういうふうになっています。「こうして私は『現存社会主義』を差し当たり次のように定義する。主要な生産手段を勤労人民の名で党国家官僚が事実上領有・独占することを通

じて人民を支配しつつ、その官僚支配をマルクスの理念と社会主義の理論で正当化した、特異な国家主義社会」。

ここでよくいわれる国家社会主義という言葉を使わなかったんですが、これは自分としては次の理由からです。

つまりこの体制は、確かに出発点の理念としては人間解放をめざしたのだけでも、そのイデオロギーの性格と、それが可能となった条件とふたつに制約されて、軍事的ないし政治的な国家暴力を支柱とする、特異な体制にかわってしまった。この体制は、武装蜂起から始まって内戦、さらに肅清という第二の内戦を経て第二次大戦を体験し、その結果東欧にひろがった。結局は軍事力だけに依存した体制ですから、東欧の場合も、ゴルバチョフがブレジネフ・ドクトリンを放棄したことを明らかにすると、とたんに崩壊する。

この社会を「国家社会主義」と呼ぶ立場が多いのですが、近代社会主義のもっとも基本的な理念が万人の生命と人としての権利の平等な保障にあるとすれば、これと原理的に相反する社会を社会主義の一類型のように呼ぶことは、私たちがめざす社会主義の本来の理念から許されない、と私は考えます。それで、このような定義を、仮説的に立ててみたわけです。

加藤 国家主義ないしエタリズム、ステイティズムという意味では、私も全く同じです。しかし、これは最後の論点とつながるんですが、確か私は中野さんへの手紙でも、なぜ社会といわないで社会主義というのか、と疑問を呈した。市民社会は私も平田清明さんと共に主張してきて、全くその通りだと思っ

けれども、あえて社会主義と名付ける必要があるんだろうかということ、個人的な書評として書いたわけです。

ただ、その問題に入る前に、いまおっしゃったこととの関係で、ロシアに七四年間存在した体制をどのように名付けるにせよ、歴史から切り離してエピソードにしてしまうと、抑圧の体制だったからといって研究しないということでは何物をも生み出さないことは、非常にはつきりしている。私はとりわけ日本人に向けられた爾清というものが具体的にどういうものであったのかということで、この間、「モスクワで爾清された日本人」（青木書店）とか「国民国家のエルゴロジ」（平凡社）で研究してきました。今でもそちらの歴史的探究の方を続けているわけです。

例えば、最近出ました溪内謙さんの「現代史を学ぶ」という岩波新書の中では、先ほども議論になったヴォルコゴノフの歴史などは時流に従った政治的転身の結果であって、新史料はその正当化に利用されたにすぎないから歴史学としては評価できないとか、歴史学としてはE・H・カーやアイザック・ドイッチャーのものは歴史に残るであろうけれども、今日ソ連邦が崩壊したからといってあれこれいっているようなものは歴史に残るものはないといっていますね。中野さんの今度の本についても必ずしも肯定的ではない評価をしている。

そういう日本のロシア史研究、ロシア史というよりもソ連史研究ないしソビエト研究として展開されてきた歴史学者たちのソ連像ないしロシア像に対するご意見とはどうでしょうか。

## ロシア史家に問う

中野 私は歴史の専門家、もちろんロシア史の専門家じゃありませんので、一人のマルクス主義研究者、思想史の研究者として発言したわけです。しかもロシア革命を含めた括弧つきの現存社会主義の全歴史と全教訓は、決してロシア史家などだけの独占的な対象ではなく、その問題にかかわった社会主義やマルクス主義、レーニン主義等々の問題と実践的・理論的に何らかにかかわったすべての人が、自分なりに決算を出さなきゃならない問題のほうです。

そういうわけで、一人の思想家として出したつもりなんです。同時に専門家に問うたわけで、例えば溪内謙さんにも和田春樹さんにもこの本を送って、これについての批判・意見を求めているわけです。溪内さんのように、専門家でない者が誠実に考えて提起した問題に正面から答えようとしなくて、「立場を異にする」などの言葉で逃げるのは、歴史家としての破産の自己宣告にすぎません。また、ヴォルコゴノフの本に問題があるのなら、ではこういう史料をどう読むべきか、読者の疑問に答える義務があるはずですよ。

私が非常に大きな問題として繰り返しいっているのは内戦での一〇〇〇万人という人命の犠牲、それから三〇年代以降の「爾清」という名の、一〇〇〇万人を超えるといわれる国家テロルによる市民の犠牲の問題です。KGB文書にもとづいて最近「スターリンに迫害された人たち」を書いたロシアのヴァク

スベルクも、スターリンによるジェノサイドは二五〇〇万人に及ぶ、と書いています。でも不思議なことに、岩波新書で浜内さんや和田さんが書いた二つの本の中にも、この膨大な犠牲の意味についてはほとんどまったく触れられていない。しかしこれは、社会主義というものを論ずる場合の、根本的な問題ではありませんか。自由の一定の制限とかを伴っていたということなどでは済まされない規模の、ヒトラーが殺したよりも多いといわれるほど人間を、しかも自国の人民を殺している——これでも多少歪んだ社会主義といえるのかどうか。これは、人命や人権に対する学者の市民感覚の問題でもあります。わが国の社会主義法学者の間で、モスクワ裁判五〇周年を機にこの問題を徹底的に追求した、という話もきかない。日本人のスターリン主義犠牲者についても、これを系統的に追求しているのは、今のところあなただけで、もちろん日本共産党も何もしていない。加藤 私などはむしろ、それが社会主義の名においてなされたということを逆に重視するわけです。旧ソ連からは、クレムリンの秘密史料集とかコミンテルンの史料集とかロシア革命の指導者の個人ファイルとか、コミンフォルムについても新しい史料がどんどん出てきていますし、肅清に関する史料も私自身が使っていますが次々に出てきているわけです。私も国家主義という場合には、ソーシャリズムではなくて、なぜステイティズムになったのかという、まさにソーシャリズムが社会と国家の関係からいえば逆転して現れたのかを重視するわけです。

しかしそれがソーシャリズム、社会主義という名前で二〇世

紀の中核的な歴史を貫いた以上、あえて社会主義という言葉を守り続けるべきものなのかどうか。歴史的に存在した社会主義一九世紀初頭から二〇世紀に存在した様々な社会主義の理念の中に孕まれている様々な要素を民衆的に汲み上げるということは有益で、実際にそれは今でも様々な社会運動や社会民主主義が引き継いでいると了解するわけですけれども、それをあえて社会主義像と呼ぶべきか、新しい社会主義像という形で提起すべきかについては、現在の私は懐疑的になっています。後世にそれが社会主義と呼ばれるのなら、それはそれで構わないわけですが。

中野さんの今度の本の最後の言葉でいえば、「資本主義社会から市民主義社会へ」という理念を出されています、これは私と全く同じなわけです。しかしその市民主義社会を社会主義とあえて名づけなければならぬ根拠というのが、私には今一つ不分明なんです。これを最後におっしゃっていただければと思います。

### 二一世紀の社会主義象をどう展望するか

中野 その点はいろんな合評会の中でも出てくる問題でして、「労働運動研究」を出している労働運動研究所での議論でも出ておりました。いわれているところの市民主義社会と、「資本主義社会からいわば市民主義社会への徐々たる推転」というのを、もう少し展開してほしいという質問です。

加藤 私が中野さんに書きました手紙でいいますと、「資本主

義社会から市民主義社会へを二一世紀の社会像ではなく社会主義像としてあえてとらえることは、どのような意味があるんでしょうか」という質問になるんですけども。

中野 それはかなり考えさせられたし、自分でも書いてるうちに、これは社会主義というべきかどうかということがちよつと分からなくなるときもありましたね。しかし考えてみると、それも我々が従来の社会主義像、社会主義についての一つの固定観念というようなものにとらわれているためだと考えてもいんじゃないか。ゴルバチョフと密接に連帯していたロシアの社会学者のザスラフスカヤ、彼女の書いた『第二次社会主義革命』という本などでも、次の新しい社会主義の特徴としては生産手段の公的所有を不可欠の条件に並べていないんですね。

はつきりしていることは、私たちがめざす社会の第一の前提が、市民としての人権と自由をいっそう保障されることです。またこの自由にもとづいて、自分にかかわる事柄を互いに平等に決定できる民主主義です。そしてこの自由と民主主義が、政治生活の領域だけでなく、市民社会の領域にまで及んでいく、とりわけ経済生活の分野で社会的な平等と公正が貫かれてゆくことが、必然的な進歩の方向ですから、結局のところ、新しい段階での社会民主主義のいっその発展、という以外にない、と思います。またその場合、私的所有と市場とが原理的に廃止されることもありえないことは、それが人間の自由の必然的条件を構成するから、です。

加藤 生協の問題なんかもずいぶん書かれていますね。

中野 自由を大前提にした上で、これまでの社会主義がめざしてきた搾取の廃絶を含む社会的正義のいっその実現に向かつて進むためには、いろいろな要求を総合的に実現するのにふさわしい、社会・経済システムの構築が問題になります。生協や各種のボランティア活動は、最初からその活動も資本も自由でしかも社会化されているから、こういうシステムのパイオニア部門といつていい。私的企業の場合も、その所有の法制的形態は一応別にしても、労働者の能力が高まってその管理に加わり、市民が企業の活動を、社会的に有用なように規制していく、こういうプロセスを通じて、「資本の市民化」とでもいうべき傾向が、だんだん抜がってゆく展望は、次の世紀にかけて大いにあると思います。もちろん反対の傾向との間に闘争はおこるでしょうし、また企業には効率と平等という相反する要求がありますから、そのありかたは単純ではありませんが、こういう意味での「社会化」が、次の時代の社会主義のひとつの鍵になるだろう、と考えています。

加藤 私などは「東欧革命と社会主義」や今作っている「エルゴジの政治学」(花伝社近刊)で展開しているのは、それは経済的民主主義という概念で処理できるのではないかということです。つまり従来の社会主義思想に含まれていた所有の問題や分配の問題というのは、これはアメリカのリベラリズム左派などから出てきている議論を使いながら、私としては展開しているんです。一九世紀以来の社会主義思想が汲み上げてきた財産共同体とか平等の理念というのは、今日例えばロバート・

ダールが企業の市民的所有という形で提起している問題とほとんど変わらないんじゃないか。そうだとすれば、デモクラシーというカテゴリーの、いわば社会的民主主義というカテゴリーの中の下位概念である経済的デモクラシーのレベルに従来の社会主義が提起してきた問題というのは指定されるのであって、それを社会主義と呼ぶか、あるいは市民的市場とでも呼ぶか、あるいは市民的所有と呼ぶか等々という問題は、二一世紀においては二義的な問題ではないか、という扱いを今の段階では考えているんです。

ただ、もう一つの問題は、カウツキーがかつて人間解放の思想としての社会主義・共産主義という観点で、原始キリスト教からずつと歴史をたどったことがありますね。社会主義という言葉自体は一八三〇年代ぐらいに初めて生まれたものですけれども、そこに込められていた理想や理念というのは実は人類史とともに古い。そういう宇宙史・生物史・人類史のもっと長いタイムスパンのなかで見れば、社会主義思想というものをもっと広くかつ深く再生できることになるんじゃないでしょうか。そこでは二〇世紀のソビエト型社会主義も一九世紀のマルクスの社会主義も広い意味での社会主義のごく一部ということになります。二一世紀にも社会主義というカテゴリーで扱う領域の問題がひらけてくる。経済的カテゴリーでは覆い尽くせないヒューマニズムとか人間解放とかという理念と結び付いていくような気がするんですけども。中野さんは、どちらかかというところいう考えに近いでしょうか。

中野 「現存社会主義」、あるいはこれまで現存した「社会主義」がああいう状況だったために、社会主義という思想自体が死んでしまうんじゃないかといわれる現在ですが、二一世紀に向けて、人類が直面する諸課題が人間の高次な連帯をますます必要とするなかで、社会主義が新しい生命を持って発展する可能性がある、またそうあつてほしいという、希望があります。

これまでのマルクス・レーニン主義では、社会主義は自然史的必然と考えられ、その根拠は史的唯物論という物質的土台のなかで発展する、生産の社会化と所有の私的性格の間の矛盾にある、と説明されてきました。これに依拠していたのが第二インターナショナルまでの古い社会民主主義主流だとすれば、レーニン主義は、上部構造、国家の役割を重視し、プロレタリアの権力によつてこういう社会をつくることができる、と考えた。しかし、二〇世紀の世界史は、社会主義のこうした必然性というものは、土台にも上部構造にもない、ということを教えてくれました。また、所有関係を変えたつもりでも、人間の本性は変わらない、場合によつてはもつと隷属した存在になるということも、わかりました。社会構造や所有関係などの変革を契機のひとつにして、人間が全体として人間化する、より高い自由のうちでより深く深い連帯を求める存在に、自覚的に変わつてゆく、そして人間の存在とは、マルクスとエンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』によれば人間の現実的生活過程のことでだから、人間の生活そのものが、精神生活を含めて高次化し、豊かになり、こうして人間の生活が真に「社会化」する、こう

いうプロセスはもう一部で始まっていますが、次の時代の社会主義とは、その上に展望されるのではないか、と思うのです。このあたりは、前著の「生活過程論の射程」（窓社）で展開したことです。今回の本では、最後の章でいくつかの予測を出してみました。

加藤 そういう意味では社会主義的なレーベン、生活・生命の理論という意味でしょうか。そのへんになると今度は、例えばハーバマスの生活世界概念とかベルンシュタインとの関係とかというのでも聞きたいところですけど、時間もなくなりましてのでこのぐらいにしたいと思います。

【なかの・てつぞう】一九三〇年生まれ。札幌学院大学文学部教員（人間学・社会思想史）。著書は「マルクス主義と人間の自由」「マルクス主義の現代的探求」（共に青木書店）  
【かとう・てつろう】一九四七年生まれ。一橋大学教員（政治学）。

\*

加藤氏とのこの対談は一九九五年七月に行われたもので、したがってここで「今年」と言っているのは九五年のことです。この対談と関係が深い九五年の中野論文としては、「エンゲルスの哲学とマルクスの哲学」（エンゲルスと現代）、お茶の水書房所収、「唯物論の現代的再生のために」（思想と現代）四〇号、「新しい社会主義像の原理的探究をめざして」（労働運動研究）九五年六月号、それから本誌九五年九月の小論文などがありますので、あわせてご検討・ご批判いただければ幸いです。

（一九九六年一月、中野）



# ある発言

高橋昇著、写真・丹野清志

雑誌「技術と人間」の巻頭言、25年の集大成。定価三〇〇円＋税



技術と人間

〒162 東京都新宿区神楽坂3-6-12

☎03-3260-9321 FAX.03-3260-9320